クロスホテル前の無名だった通りは９年前に龍馬通りと名がついた。

暮らす旅　京都

文明は退化か

文・写真／松岡伸吾（暮らす旅舎）

コロナの最中にも関わらずこの夏、あちこち仕事で旅をした。鹿児島、盛岡、徳島、もちろん京都も。今さらながら気づくのは、それぞれの土地に生き続ける歴史上の人物の存在だ。鹿児島なら西郷隆盛。盛岡は宮澤賢治。徳島では吉野川上流の平家伝説。西郷さんや賢治は今も町の最強の広告塔でもある。

鹿児島の城山から桜島を望むと、大河ドラマの影響もあるけど、幕末と明治維新がそこにある気がする。盛岡に行けば、大地に目を落とす賢治の姿が目を離れない。地元の西郷さんや賢治への愛に旅人はたちまち感染してしまう。

京都はその点、引き出しが多すぎ、さすが千二百年の古都だと思う。訪れる場所で、当然だが見える歴史も人物も変わってくる。

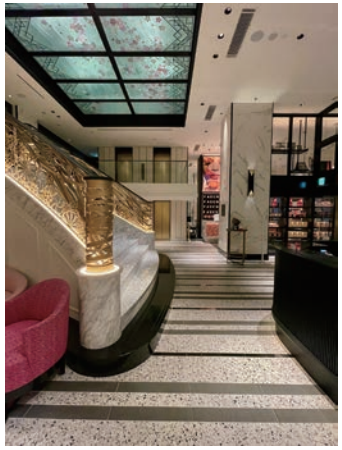
今回泊まったのは、木屋町と河原町を結ぶ龍馬通りに立つクロスホテル京都。向かいには坂本龍馬が才谷の偽名で滞在し、船中八策をまとめた酢屋がある。歴史ある材木商の２階は海援隊京都本部であり、隊士や陸奥宗光など多くの志士たちも投宿した。ホテルの前身はボーリング場もあった娯楽施設で、その昔は高瀬川の五之舟入だった。龍馬は２階の出格子から舟入に向けてピストルを撃ち大政奉還の決意を示したのだそうだ。あたりには幕末の記念碑も多く、三条通に上がると佐久間象山と大村益次郎の遭難の碑もある。

伝統と革新、破壊と再生、進化と退化、文化と文明、西洋と東洋など、明治維新後から現在までの京都を、対立するキーワードを軸に思いを巡らせば、町の来し方行く末が見えてきはしまいか。

和食の本場でありながらパンの消費量は日本一。次々と壊される町家跡に乱立するマンションやホテル。点在する古い教会や洋館探し。南禅寺の水道橋と水力発電。新撰組が走りまわった幕末の京都を想像するのも一興だ。桜や紅葉がなくても京都はやっぱり楽しい。

坂本龍馬が投宿していた酢屋は材木商で２階は見学もできる。

京都水族館とコラボしているクロスホテルのロビーには鴨川のオオサンショウウオがいた。



古いホテルを全面改築して今年３月に誕生したパリのフォションホテル。

元禄時代から続く川端通りにある薬房だがついにこの秋に店を閉じた。